報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	日本人英語学習者の主観的困難点に対処する学習 e ポートフォリオの可能性 ―紙/電子媒体の振り返りシートを活用して― (Exploring the Possible Effectiveness of ePortfolio Platform in Dealing with Japanese EFL Learners' Subjective Difficulties through the Use of Paper-based or Electronic Reflection Sheets)
氏　　名	吉村 愛子

論　文　内　容　の　要　旨

本研究の目的は、紙または電子媒体の振り返りシートを用いて、資格試験対策講座に学ぶ日本人英語学習者の聴解・読解テストに関する主観的困難点を採取し、eポートフォリオプラットフォームをその主観的困難点対処ツールとして活用することの効果・影響を検討することである。具体的には次の5つの研究課題に関する質的研究及び量的研究を行った。研究課題1は、「資格試験対策講座に学ぶ日本人英語学習者の主観的困難点にはどのようなものがあるか」、研究課題2は、「資格試験対策講座に学ぶ日本人英語学習者の主観的困難点に関わる変化にはどのようなものがあるか」、研究課題3は「eポートフォリオの活用は、振り返りシート媒体が電子であろうと紙であろうと、資格試験対策講座に学ぶ日本人英語学習者にとってスコアの伸びの見地から有効か」、研究課題4は「振り返りシートを紙媒体にするか電子にするかで、テストスコアの維持・向上に差異はあるか」、研究課題5は、「研究課題1から4を踏まえて、ポートフォリオを活用して学習者の主観的困難点に焦点を当てる事の意義・影響を総合的に検討する」である。研究課題1と2については質的研究を行い、研究課題3と4については量的研究を行った。研究課題5は、質的研究・量的研究の研究課題の結論を踏まえて総合的に検討した。さらに、以下の研究仮説を検証した。研究仮説1は、「ポートフォリオは、自己評価の能力及び自律性を向上させる効果があると指摘されており、語学スキルの育成効果が期待されている。したがって、振り返りシート媒体が電子であろうと紙であろうと、自律的学習支援を目的としたeポートフォリオに、多数回アクセスした学習者の事前から事後にかけてのスコアは、アクセスが促されなかった学習者に比べて、より向上する」であり、研究仮説2は「eポートフォリオプラットフォームの一部が紙媒体の紙振り返りシート群と、全てが電子媒体である電子振り返りシート群を比較した場合、主観的困難点対処資料にアクセスしやすい電子振り返りシート群が、紙振り返りシート群に比べて事後テストスコアはより高くなる」である。

各研究課題及び研究仮説に関する調査は、東海地方の大学で筆者が担当する、必修科目の資格試験対策講座に在籍する学習者を対象に行った。研究課題1と2のデータの範囲は、学習歴等に関する事前アンケート、学習者が毎授業後に紙または電子媒体の振り返りシートに記述した、学習者の主観的困難点に関する記述、成績とアクセスの状況から選出した学習者に対するインタビューデータ、事前・事後テスト時の一言コメント、教師の参与観察、教師の内省記録である。毎回の授業後に振り返りシートを提出させ、そこに記述された学習者の主観的困難点を主要な分析対象とした。質的研究においては、Miles, Huberman & Saldana (2014) に基づき分析を行った。研究課題3と4のデータの範囲は、事前テストスコアに統計的に有意な差が見いだされなかった2群である、電子振り返りシート群と紙振り返りシート群に在籍する124名（電子振り返りシート群62名、紙振り返りシート群62名）の事前テストスコア、事後テストスコア、スコアの伸長（事後テストスコアー事前テストスコア）、TOEIC資料へのアクセス回数が主要なデータの範囲であり、結果を考察する際に、総アクセス回数についても検討した。研究課題3と研究仮説1を検討するために、電子振り返りシート群、紙振り返りシート群の群別に相関分析を行い、電子振り返りシート群、紙振り返りシート群のそれぞれをアクセス回数の観点から上位群と下位群に分け、スコアの伸長（事後テストスコアー事前テストスコア）を比較した。そして研究課題4と研究仮説2を検討するために、前述の、事前テストスコアに統計的に有意な差が見いだされなかった2群に在籍した124名のデータについて各セルの人数を同数にした上で、振り返りシート媒体の要因・アクセス回数の要因・テスト時期の要因の影響を検討すべく、3要因分散分析を行った。量的研究における検定には全てSPSS Statistics Version 26を活用した。

質的研究の結果、研究課題1については、『知識』、『方略』、『意識や感覚』、『誤答（客観的困難点）反映型』、『授業の進め方』、『テスト形式』の6種類のパターン・コードで分類される15種類の主観的困難点が明らかになった。

それらは、 (1)　語彙についての主観的困難点、(2)　文法についての主観的困難点、 (3) 方略への関心と未習得感、(4)　方略の限界、(5)　促進的不安に基づく主観的困難点、(6) 解答時の意識についての主観的困難点、(7)　聴解・読解についての漠然とした困難感、(8) 集中力についての主観的困難点、(9)　時間制限についての主観的困難点、 (10) 客観的困難点参照型主観的困難点、(11) 客観的困難点予測型主観的困難点、(12) 演習量についての主観的困難点、(13) 速度・進度についての主観的困難点、(14) テストの｛新｝形式についての主観的困難点、(15) 他テスト形式に対する関心と未習得感である。このうち、『誤答（客観的困難点）反映型』に分類される2種類の主観的困難点は、教師が誤答から推察することは不可能ではないが、その他13種類の主観的困難点はスコアや学習意欲の維持・向上に影響を及ぼすものであるが誤答のみから推察することは非常に難しい。振り返りシートで学習者の主観的困難点を採取する意義が示唆された結果となった。

研究課題2に関する調査の結果、『習得感に関する変化』、『具体性に関する変化』、『自己採点に関する変化』、『主観的困難点を改善するための目標に関する変化』の4種類のパターン・コードに分類される16種類の主観的困難点に関わる変化が明らかになった。

それらは、 (1)「語彙について未習得感から習得感へ」、(2)「文法について未習得感から習得感へ」、(3)「聴解について未習得感から習得感へ」、(4)「読解について未習得感から習得感へ」、(5)「方略について未習得感から習得感へ」、 (6) 「主観的困難点が限定され、より具体化される主観的困難点」、(7)「自己評価スキルの向上による具体性の向上」、(8)「主観的困難点と客観的困難点の距離の短縮によってもたらされる具体性の向上」、 (9)「習得感・未習得感による自己採点に関する変化」、(10)「客観的困難点の改善または解決困難による自己採点に関する変化」、(11)「自己評価基準が変化することによる自己採点に関する変化」、(12)「自己評価スキルが向上することによる自己採点に関する変化』、 (13) 「自己評価スキルの向上による目標の変化」、(14)「主観的困難点の変化による目標の変化」、(15)「注目対象分野が変わる事による目標の変化」、(16)「多忙等の状況変化による目標の変化」である。このうち、『習得感に関する変化』の中には、一旦習得感に変化した事柄が、再び未習得感に変化するケースも一部明らかになった。事前テストスコア・事後テストスコア・スコアの伸長・TOEIC資料へのアクセス回数の観点から5つのクラスターに分け、10名の学習者にインタビュー調査を行った結果、主観的困難点対処資料へのアクセス回数が多い学習者は促進的不安を活用して継続的に自らの主観的困難点に向き合っていたことが明らかになり、eポートフォリオを活用して主観的困難点を改善・解決する中で、学習スキル・自己評価スキル・学習意欲を向上させ、結果的に自律的学習が促進されたことが示唆された。

研究課題3と研究仮説1についての調査の結果、電子振り返りシート群、紙振り返りシート群の各群で、アクセス回数順に上位群と下位群に分け、マンホイットニーU検定でスコアの伸長を比較した結果、両群ともにアクセス回数上位群の学習者のスコアの伸長はアクセス回数下位群の学習者のスコアの伸長に比べて0.1%水準で有意に大きいことが明らかになった。このことから研究課題3については、「主観的困難点対処ツールとしてのeポートフォリオの活用は、振り返りシート媒体が電子であろうと紙であろうと、資格試験対策講座に学ぶ日本人英語学習者にとってスコアの伸びの見地から有効である」ことが明らかになった。さらに、研究仮説1については、「振り返りシート媒体が電子であろうと紙であろうと、自律的学習を支援することを目的としたeポートフォリオに多数回アクセスした学習者の事前から事後にかけてのスコアは、アクセスが促されなかった学習者に比べて、より向上する」という仮説が支持された。

研究課題4と研究仮説2についての調査の結果、電子振り返りシートを使用したアクセス回数上位群のテストの伸びが最も大きいことが明らかになり、次いで紙振り返りシートを使用したアクセス回数上位群、電子振り返りシートを使用したアクセス回数下位群、紙振り返りシートを使用したアクセス回数下位群の順にスコアの伸長が確認された。アクセス回数上位群の電子振り返りシート群と紙振り返りシート群は、どちらも事前テストから事後にかけて統計的に有意にスコアが伸びていることが明らかになり、アクセス回数の要因が事後テストの結果に少なからず影響を及ぼすことが明らかになった。また、研究課題4及び研究仮説2については、アクセス回数が多い場合は、電子振り返りシートを使用したほう

が紙振り返りシートを使用するよりスコアが大きく向上することが明らかになった。したがって、研究課題4については、「アクセス回数上位群に関しては、電子振り返りシートを使用した方が紙振り返りシートを使用するより、事後テストスコアがより向上し、事前から事後テストにかけてのテストスコアの伸長がより大きくなる可能性が高い。」と結論付けられる。また、研究仮説2については、アクセス回数が多い学習者に関して、「主観的困難点対処資料にアクセスしやすい電子振り返りシート群が、紙振り返りシート群に比べて事後テストスコアはより高くなる」という仮説が支持された。

以上の質的研究・量的研究の結果から、振り返りシートで学習者の主観的困難点を採取して、eポートフォリオに主観的困難点対処資料を搭載することにより、その資料へのアクセスを多く行った学習者の主観的困難点は改善・解決される可能性が高いことが明らかになった。したがって、学習者の主観的困難点に焦点を当て、対処することは結果として、学習者の語学スキルの成長に好影響を与える可能性があることが示された。また、eポートフォリオを積極的に活用することによって、自己評価スキル、学習スキル、学習意欲の向上や自律的学習の促進、主観的困難点への継続的対処が期待できる。

更に広い文脈での調査が継続されることにより、より一層多様な主観的困難点の採取と対処につながり得る。多忙等により主観的困難点対処資料へのアクセスと習得が促されなかった学習者の、より能動的・自律的な学習を促すことが今後の課題である。